



久保有政著『聖書的セカンド・チャンス論』を
『キリスト教神学』の視点から
クリティカルに分析・評価する

2007.11.13

JEC牧師会発題講演・質疑応答

一宮基督教研究所

安黒務

発題の概要

1. 序:「セカンドチャンス論」が注目される背景(1-3)
 - ①人類学的、②情緒的、③解釈的、④文化一般からの理由〔エリクソン氏〕
2. 『セカンドチャンス論』の**聖書的根拠**の比較検討(4-13)
 1. 死後の回心の機会を示す八つの聖句〔久保氏VSウッド氏〕
 2. 死後の回心の機会を否定する七つの聖句〔ウッド氏〕
 3. 神学四部門の原則確認〔宇田氏〕と、久保氏の「誤り」
3. 『セカンドチャンス論』の**前提としての“陰府”理解**の検討(14-15)
 1. 久保氏の「陰府」理解と牧田氏の「陰府」理解の手順の比較
 2. 久保氏の「誤り」と牧田氏の「中間状態」まとめ
 3. エリクソン氏の「死と中間状態」「最終状態」の教理の意味
4. 『セカンドチャンス論』の**釈義方法・教理形成手順**の検討(15-17)
 1. 久保氏の「誤り」と教理形成の正しい手順の確認〔エリクソン氏〕
 2. エリクソン氏の「神学」理解と久保氏の「誤り」
 3. エリクソン氏の「教理形成」手順と久保氏の「誤り」
 4. エリクソン氏の「神学的言明の權威の度合い」識別と久保氏の「誤り」
5. 福音主義者が共有してきた**「救いの教理」における主なポイント**(17-22)
 1. JEC信仰告白とウエストミンスター信仰告白:補完的役割を認識する
 2. プロテスタント教会の「信条」の役割について
 1. 聖書論:ウエストミンスター信仰告白第一章「聖書について」
 2. 聖書論:ローザンヌ誓約第二項「聖書の權威と力」
 3. 聖書論:エリクソン著『キリスト教神学』 靈感の定義、無誤性の定義
 4. キリスト論:ローザンヌ誓約第三項「キリストの独自性と世界性①②」
 5. 終末論:ウエストミンスター信仰告白第32章「人間の死後の状態について、また死人の復活について」
 6. 終末論:ウエストミンスター信仰告白第33章「最後の審判について」
6. 資料:牧田氏「中間状態」(23-28)、エリクソン氏「神学的言明の權威の度合い」(29)



1-1〔序〕M.J.ERICKSON “EVANGELICAL LEFT”より より古く、制限的な見方に対する不満が起こってくる理由 －①人類学的理由

- 流動性と世界化が増大することにより、クリスチャンは他の偉大な諸宗教の信仰者と接触するようになる。彼らはかつてそうであると考えられていた「異教徒」のようではなく、善良で、道徳的な人々であることが分った。自然に「彼らはたまたまイエスを信じることができなかつたというだけで、神はこのような人々をどのように拒絶したり、地獄に落としたりされるのか？」という疑問が起こってくる。



1-2〔序〕 M.J.ERICKSON “EVANGELICAL LEFT”より より古く、制限的な見方に対する不満が起こってくる理由 ―②情緒的理由

- 彼らはイエスのことを決して耳にすることはなかった、そしてその結果として彼らは事実**信じる機会をもたなかった人々を愛と義の神が非難されるという考えは、**感じやすく、優しい人々にとって不快であり、感情を害することである。これは特に、終わりのない苦しみとしての地獄の思想についてである。絶対に他の道があるべきである。



1-3〔序〕 M.J.ERICKSON “EVANGELICAL LEFT”より より古く、制限的な見方に対する不満が起こってくる理由 －③解釈的理由

- 特に、パウロの手紙において、Iコリント15:22やコロサイ1:20のような、**強く普遍的なものとして思える、幾つかの聖書箇所が存在する**。通常、福音主義者によって支持されている権威と解釈の見方に真実であることは、それらの箇所を扱う試みにおいて伝統的排他主義者の見方にとって、真の困難さを提示している。
 - 新改訳 Iコリ15:22 すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。
 - 新改訳 コロ 1:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。



1-4〔序〕 M.J.ERICKSON “EVANGELICAL LEFT”より
より古く、制限的な見方に対する不満が起こってくる理由
－④文化一般からの理由

- 宗教、哲学、さらに幾つかの他の領域において、すべての見方が等しく真実なものとしてみなされる、相対主義の強い傾向が存在する。このことの一部は、だれかに「彼らは間違っている」とか確かに「彼らは罪人であり、地獄に縛られている」と告げてはいけないという「**伝道において求められる礼儀とか配慮**」において反映されている。



2. 『セカンドチャンス論』の聖書的根拠の検討 — 死後の回心の機会を示す八つの聖句 —

久保有政著『セカンドチャンス論』概要

1. 人間の死後の状態
2. 聖書的セカンドチャンス論
3. セカンドチャンスを示す八つの聖句
4. セカンドチャンス質疑応答
5. セカンドチャンス否定論への反論

ウィリアム・ウッド著『セカンドチャンスは本当にあるのか』概要

1. セカンドチャンス論とは？
 2. セカンドチャンス論が示す聖書的根拠
 3. セカンドチャンス論の聖書的根拠の検討
 4. セカンドチャンス論を否定する聖書的根拠
 5. 結論
- 

2-1-①新改訳 ルツ 2:20

2:20 ナオミは嫁に言った。「生きている者にも、**死んだ者にも、御恵みを惜しまれない主**が、その方を祝福されますように。」それから、ナオミは彼女に言った。「その方は私たちの近親者で、しかも買い戻しの権利のある私たちの親類のひとりです。」

久保有政著『セカンド・チャンス論』

- 神は「**死んだ者にも、御恵みを惜しまれない主**」と呼ばれているので、ハデスに行った人々も神の恵みが受けられるはずだ。

ウィリアム・ウッド著『セカンド・チャンスは本当にあるのか』

- ナオミが「**死んだ者**」と言っているのは、**先立った自分の夫であり、二人の息子たちのこと**です。三人ともユダヤ人であり、神との契約関係にあった人間です。ですから「死んだ者」の中に、陰府にいる善人も悪人も含まれていると断言するのは、**文脈からして無理な解釈**である。
- 次に、死んだ者に、どのような恵みが与えられたかという問題があります。ルツ記の文脈において考えるなら、それは明らかに、**主が、エリメレクおよびその息子たちの名がイスラエルから消し去られないようにしてくださった**、ということです。
- ハデスに行ったすべての魂に、救われるチャンスが与えられる、という話ではありません。



2-1-②新改訳 エレ 18:8

18:8 もし、わたしがわざわいを予告したその民が、悔い改めるなら、わたしは、**下そうと思っていたわざわいを思い直す。**

久保有政著『セカンド・チャンス論』

- 神は「**思い直しの神**」であって、罪人が悔い改めるなら、その罪を赦し、さばきを下すことを思い直される。地上においてもそうだから、なおのことハデスでも悔い改めて滅びを免れる人々が多くいるはずだ。

ウィリアム・ウッド著『セカンド・チャンスは本当にあるのか』

- ここで「神は思い直しの神である」ということから、「神のご性質は陰府でこそ発揮される」とされているのは、**論理の飛躍**と言える。ヨナのメッセージはあくまで地上で、**生きている間に悔い改めた人間に対して示されたあわれみ**であって、ハデスにいる人々の滅びについて神の考えが変わった、とは聖書のどこにも書かれていません。それほど大事なことが、聖書に明確に言及されていないということは考えにくいことです。



2-1-③新改訳ヨハ 5:25

5:25 まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。

久保有政著『セカンド・チャンス論』

- これは、ハデスにいる人間が福音を聞いて生きるようになる、つまり救われることを明示している聖句である。

ウィリアム・ウッド著『セカンド・チャンスは本当にあるのか』

- 信じる者は、霊的に死んだ状態から永遠のいのちへと移されています。クリスチャンは、信仰を持ったその日から、永遠のいのちを所有していることになるのです。



2-1-④新改訳 I ペテ3:19 その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。3:20 昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。

久保有政著『セカンド・チャンス論』

- 「セカンド・チャンス」を最も明白に語っている箇所である。

安黒務編集「死後の回心と救いのチャンスについて」 Erickson “How shall they be saved ?” よりの翻訳抜粋

- 解釈において、**180の解釈**の可能性、しばって**六つの類型**の可能性がある。完全に満足のゆくものはない。私たちは困難さが最小のものを見出すことで満足しなければならない。

- ひとり聖書解釈者そして神学者として、私は特にその文脈において最も問題の少ないものとして、それらのうちの最初のものに、**御霊によってキリストがノアを通して当時の人々に語りかけている**という思想を見出す。しかしながら、私が組織神学者としてその箇所に、全聖書の啓示を首尾一貫した全体においてもたらそうと試みつつアプローチするとき、それはさらに強靱さをもって好ましいものと分かる。
- 結論において、私たちは、明確な聖書の教えが存在せず、そして論点において他のより明確な聖書の教えと矛盾しているように思われる**死後伝道の見方**を受け入れるかどうか直面している。アピールされている主な聖書箇所は、ロバート・モウンスが「新約聖書のすべての中で理解するこの**最も困難な箇所**と広く認識されている」と語っているものである。そのように**曖昧な箇所に人間の永遠の運命についての教理を置く**ことは奇妙なことのように思われる。



2-1-⑤新改訳 ピリ 2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、**地の下にあるもののすべてが**、ひざをかがめ、
2:11 **すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白**して、父なる神がほめたたえられるためです。

久保有政著『セカンド・チャンス論』

- **ハデスにいる人々**が「イエスは主である」と告白するなら、いったんそこへ行っても救われる可能性がある。

ミラード・エリクソン著『キリスト教神学』

- この見解は魅力的だが、残念ながら維持できない。引用されている箇所は、それらが教えていると万人救済主義者が主張していることを実は教えていないからである。
- すべてのものをひとつにする和解とは、墮落した人類を神との交わりに回復させることではなく、**被造物世界の中に調和を取り戻す**ことである。それは特に、**罪を主に服従させる**ことによってなされる。これは人間が神を受け入れるのではなく、神が人間の**反逆を抑える**ことである。悪しき者の告白は、主に熱心に従う部隊ではなく、**勝利した軍隊に投降する部隊**として描かれるべきである。



2-1-⑥新改訳 黙 5:13

5:13 また私は、天と地と、**地の下と**、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「**御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。**」

久保有政著『セカンド・チャンス論』

- 救われたものだけが神を賛美し、また賛美するように呼び出されている。ですから、**地の下(ハデス)にいる者が主を賛美する**のであれば、それは彼らが救いにあずかったことを示している。

ウィリアム・ウッド著『セカンド・チャンスは本当にあるのか』

- 地の下にいる者の口から、「**御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。**」との告白ができるのは、ピリピ書の「イエスは主である」との告白と同じ理由によるのであり、「**すべての敵をその足に置く**」ことのゆえである。



2-1-⑦新改訳 黙 20:12 そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。...20:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

久保有政著『セカンド・チャンス論』

- 最後のさばきの法廷に「いのちの書」が提出されているのは、ハデスの死者に救われる者が存在することを示しているのではないか。

ウィリアム・ウッド著『セカンド・チャンスは本当にあるのか』

- 「いのちの書」の提出は、必ずしも、ハデスのグループの中から救われることを保証していません。「いのちの書」に名前が書かれていないことを見せる、ことも十分に考えられます。なぜなら、**火の池に投げ込まれる人々のことは書いてあっても、救われて御国に入った人々への言及はないから**です。「自分の行ないに応じてさばかれた」ということが二度も強調されています。



2-1-⑧新改訳 ロマ 14:9

14:9 キリストは、**死んだ人にとっても**、生きている人にとっても、**その主となるために**、死んで、また生きられたのです。

久保有政著『セカンド・チャンス論』

- この聖句は、キリストは死んだ人、すなわちハデスにいる人々にとっても主であることを示しているから、**ハデスに行っても**、そこでキリストを主と認めるなら救われるはずだ。

ウィリアム・ウッド著『セカンド・チャンスは本当にあるのか』

- この聖句直前の7-8節を読むと、文脈からわかるように、パウロは**クリスチャンの話**をしているのです。クリスチャンは地上に**生きている間も、また、死んで天国に行っても**、**主のもので**す。
- つまり、キリストは地上にいる信仰者、また天にいる信仰者の主となるために、死んで、よみがえられたということです。
- セカンド・チャンスとは**無関係**な箇所です。



2-2-1 ウィリアム・ウッド師による

「セカンドチャンス論」を否定する聖書的根拠①

- ルカ 16:26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』
- 死後の状態を再度、変更することは不可能



2-2-2 ウィリアム・ウッド師による

「セカンドチャンス論」を否定する聖書的根拠②

- 新改訳 ロマ 1:19 なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。
- 1:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。
- すべての人間に自然啓示が与えられているから、**弁解の余地はない**



2-2-3 「セカンドチャンス論」を否定する聖書的根拠③

- 新改訳 ロマ 2:14 — 律法を持たない異邦人が、生まれつきのみで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。2:15 彼らはこのようにして、**律法の命じる行ないが彼らの心に書かれている**ことを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。
—2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。
- 心に刻まれている**律法(良心)**という光がある。



2-2-4 ウィリアム・ウッド師による

「セカンドチャンス論」を否定する聖書的根拠④

- 新改訳 II コリ6:2
6:2 神は言われます。
「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。
- 「恵みの時」、「救いの日」はいつまでも続かない。救われるべき時は、「今」である。



2-2-5 「セカンドチャンス論」を否定する聖書的根拠⑤

- 新改訳 ヘブ 9:27-28
9:27 そして、人間には、**一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、**
9:28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられました。が、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。
- 人間は死んで、その後、裁きを受けます。この二つの間に「悔い改めるチャンスがある」と考えてはなりません。**死後、未信者はすでに裁かれているのであって、その執行命令が出されるのが最後の審判のときです。待ち時間はありますが、有罪宣告が変更されることはありません。**



2-2-6 ウィリアム・ウッド師による

「セカンドチャンス論」を否定する聖書的根拠⑥

- 新改訳 ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは**御子信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。3:18 **御子信じる者はさばかれない。**信じていない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。
- 死後に回心のチャンスはありません。人は**この世にいる間に、信じる決心を求められている**のです。



2-2-7 ウィリアム・ウッド師による

「セカンドチャンス論」を否定する聖書的根拠⑦

- 新改訳 II ペテ2:9
2:9 これらのことでわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、**不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置く**ことを心得ておられるのです。
- 「懲罰の下に置く」とは、**すでに神の怒りの御手の中にあるが、最後のときまで保たれている**ことです。



2-3-1 宇田進「神学入門」より 聖書神学的原則の確認

聖書神学的原則

- 神学が真に聖書的であるためには、**聖書をありのままに**受け取らなければならない。つまり、**聖書自身の用語で**聖書を受け入れ、**聖書そのものの基盤に**立ち、**聖書自身の見地から**研究し、その成果を提示すべきなのである。私たちは聖書を無理に異質の哲学思想の中に押し込めてはならない。

久保氏の誤り

- 聖書の言葉を**文脈から切り離し**、久保氏独特の「死後観」「陰府理解」の主張という全く**別の文脈**にはめ込んで解釈されている。



2-3-2 宇田進「神学入門」より 歴史神学的原則の確認

歴史神学的原則

- 「現在の根は過去のうちに深く根ざしている」、また「教会史は現在を説明する」ということである。現在の形で私たちに手渡された「キリスト教教理」は、実は長い戦いと試行錯誤の歴史の賜物なのである。

久保氏の誤り

- 「普遍救済主義」は聖書の証言全体の教えとは異なるものであるとの歴史神学的結論を無視されている。この結論を改訂するためには、正しい神学的手順が必要です。その取り組みは皆無です。
- 「今日の死後観の混乱は中世以来のもので...」との記述も歴史神学の学びの欠如と思われま。中世の非聖書的な「煉獄思想」を批判し、今日の聖書的な中間状態・天国・地獄理解にたつようになったのは宗教改革以来のことです。

2-3-3 宇田進「神学入門」より 組織神学的原則の確認

組織神学的原則

- 「組織神学」は、聖書神学から基本的材料を受け取る一方、歴史神学の収穫と洞察を受け止めつつ、キリスト教信仰の真理内容を系統的、組織的に提示する任務を負う学科である。特に次の点を重視する。第1に、福音の真理を、断片的、部分的にではなく、全体像を明らかにしようと努める。第2に、個々の教理をばらばらにではなく、他の諸教理との有機的な相互関連性の中で陳述しようと努める。第3に、キリスト教真理の有意義性と妥当性を現代という状況を踏まえながら立証しようと努める。
- この組織神学的訓練は、教会と伝道者に数々の利益をもたらす。第1に、神の御旨の全体を告知することを可能にし、またそれを助けてくれる。パウロは「神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいた」(使20:27)と言っているが、これは宣教者の基本的任務でありながら、実際には口にするほどやさしいことではない。「偏向」はすべての宣教者が必ずぶつかる難問である。この偏向の落とし穴から私たちを救い、必要なバランスを与え、聖書の真理の全体像を提示するようにしてくれるのが組織神学的研究である。

久保氏の誤り

- 他の諸教理との有機的な相互関連性を念頭におくとき、「セカンドチャンス論」の主張は認められません。
- 「セカンドチャンス論」は神学的偏向としての位置をしめる諸説のひとつです。



2-3-4 宇田進「神学入門」より 実践神学的原則の確認

実践神学的原則

- そもそも神学というものは、本来、最も深い意味において“実践的”な性格を持つものである。神学が目指す真理は、**生きた信仰的生の真理**にほかならない。この信仰的生とは、生の一部ではなく**根源的、徹底的な生**であり、絶えず生成しつつその真理を現実としてあかしする歴史的な生である。このような人間における根源的、徹底的な生としての信仰的生は、うちに**学への要求**を宿し、学を媒介として自らを展開し、深めまた豊かにする。神学とは、まさにこのような信仰的生とかかわる学であり、信仰的生の真理を明らかにすることを本来の任務とする学なのである。

久保氏の誤り

- 普遍的救済、福音を聞く機会なく死んでいった人々、先祖・友人・家族・子供たち等への強い思いは大切にされなければなりません。
- しかし、福音派の神学が、神の特別啓示に根差すものであるからには、御言葉のもつ權威の度合いを尊重して教理を形成していく謙遜さが求められます。**聖書が明確に述べていない事柄**について、**新しい教理を形成する權威は与えられていません。**



3-1 『セカンドチャンス論』の前提としての“陰府”理解の検討

久保有政著『セカンド・チャンス論』—人間の死後の状態

1. 死の際に魂は肉体から分離する
2. 「陰府」と地獄とは違う
3. 旧約の聖徒たちも「陰府」に行った
4. 旧約の聖徒たちは天国にいる
5. シェオル＝ハデス＝陰府
6. 陰府は幾つかの場所に分かれている
7. 陰府の「苦しみの場所」と、陰府の「慰めの場所」
8. 金持ちの苦しんだ「炎」は地獄の炎とは異なる
9. 陰府は留置場、地獄は刑務所
10. ハデスが地獄ならおかしいことになる
11. 終末論がおかしくなったとき、死後観もおかしくなった
12. この地上で回心することの意義

牧田吉和師：「中間状態」講義

1. 歴史における中間状態の教理的展開
 1. 初期の段階
 2. 教父時代
 3. 中世：煉獄思想
 4. 宗教改革者
2. 聖書における中間状態の理解
 1. 旧約における理解
 1. 多様な意味：死、墓、地獄
 2. 啓示の進展性
 2. 新約における理解
 1. 旧約→新約：意味の変化
 2. 場所的分離、裁きを受ける場所、地獄の一部、敬虔な者→祝福、悪しき者→裁き
3. まとめ



3-2『セカンドチャンス論』の前提としての“陰府”理解の評価

久保有政著『セカンド・チャンス論』—「人間の死後の状態」

- 久保氏の「**陰府**」理解は、神学教師の基本的手順が無視されている。
- 「陰府」という用語を**画一的に独特の世界観**で理解し、全聖句を解釈されている。
- そこには、最初の手順としての信頼性の高い神学事典等に目配りされたあとが見受けられません。
- そこでは「**シェオール**」という言葉には、**広い意味**があり、文脈がその意味を決定し、「悪人を裁く場所」「下る墓」「死の状態」等の意味があると指摘されています。
- また、旧約と新約の「陰府」理解においては、**啓示の進展性**という視点で取り扱うことが大切です。
- 神学的研究の基本的手順における初歩的ミスによる誤った理解です。

牧田吉和師：「中間状態」まとめ

1. 死後に、**死人の領域**に行く
2. 不敬虔な者—陰府の住人として死の下に置かれ、肉体の復活以前にも魂に苦しみ、つまり**地獄の苦しみ受ける**
3. しかし、神の民は陰府の国に留められてはいない、すなわちキリストによって陰府の力から救いだされ、**天国において慰めを受ける**
4. 新約聖書における「陰府」の教えは、旧約の教えを引き継ぎつつ、同時に旧約で**暗示的**であったものが、新約では**拡大**されている。
5. 「**神の民**」の**将来**が、旧新約の主要な関心事であり、死後の状態についての**克明な描写は数少ない**。
6. ラザロの箇所とⅡペテロ2:4以降から、正しくない者は、**陰府に閉じ込められ、最後の審判の日まで刑罰が継続**
7. クリスチャンは、「今日、あなたはパラダイスにいる」とあり、終末がくる前に、はるか遠くの日ではなくて、「**今日**」キリストとともに祝福のうちにある

3-3 死と中間状態と最終の状態に関する エリクソン著『キリスト教神学』における理解

死と中間状態の教理の意味

1. 死は敵であるが、今では打ち負かされ、神に捕えられている。我々は**死と平和に向き合う**ことができる。
2. 死と復活の間には中間状態があり、そこで**信仰者は神の臨在を、未信者は神の不在**を体験する。ここでの体験は最終の状態ほど激しいものではないが、**質的には同じ**である。

最終状態に関する教理の意味

1. **この人生でなす決断**が、我々の未来の状況を、ある時期だけではなく、永遠に支配する。
 2. 天国の主要な側面は、信仰者が**主とともにいる**ことである。
 3. 地獄とは肉体的な苦しみの場所ということもさることながら、**主と完全に最終的に分離された恐ろしい孤独**である。
- 

4-1 久保有政著『聖書的セカンドチャンス論』の聖書観・聖書解釈方法・教理形成を検討する

久保有政著『セカンド・チャンス論』の誤り

1. 聖書神学的誤り
 1. 『陰府』に関する誤った前提
 2. 文脈を無視した「読者応答批評」的な主観的解釈
2. 歴史神学的誤り
 1. この主題に関する長い戦いと試行錯誤からの教訓を学びえず
3. 組織神学的誤り
 1. 他の教理との有機的な相互関連性が考慮されていない

エリクソン著『キリスト教神学』から神学方法論を学ぶ

1. 神学方法論
 1. 神学の定義
 2. 学としての神学
 3. 神学研究の過程
 4. 権威の度合い
 5. 聖書観の確立
 2. 教理の形成
 1. 一般啓示の効力と人間の責任
 2. 神の愛と神の義の関係
 3. 万人救済主義のいろいろ
 4. 中間状態の理解
 5. 未来の審判の最終性・永久性
- 

4-2 学としての神学

エリクソンの「神学」理解

1. 神学は「**学**」と呼ぶに値する学問なのか。
2. 神学は「学」と呼ばれうる。
 1. 神学には研究すべき**明確な主題**がある。
 2. 神学は**客観的な事柄**を扱う。
 3. 神学には研究するための**明確な方法論**がある。
 4. 神学には**命題を立証するための方法論**がある。
 5. 主題についての**諸命題には一貫性**がある。

久保氏の誤り

1. 「セカンドチャンス」という明確な主題あり
2. 文脈の中にある聖句の客観的意味を汲み取らず、聖句を**文脈から切り離し、自己の主張の文脈にはめ込んで解釈**
3. ポストモダンに見られる「テキスト以外になにもなし」といった**主観主義の傾向**
4. 第三者には、その命題は**立証不可能**となる
5. 聖書全体の諸命題は、客観的整合性を考慮されない**主観的解釈が入ると諸命題間に一貫性はなくなる**



4-3 神学研究の過程

エリクソンの教理形成の手順

1. 聖書の資料の**収集**
2. 聖書の資料の**統合**
3. 聖書の教えの**意味**の分析
4. 歴史における**取り扱い**の検討調査
5. 他文化のもつ**視点**の検討
6. 教理の**本質**の見きわめ
7. 聖書外の**資料**からの光
8. 教理の今日的な**表現**
9. 解釈における中心的**モチーフ**の展開
10. 主題の**層**別化

久保氏の誤り

1. 関連聖句の収集ミス、普遍救済主義を支えるとされる聖句のみ、**一方のみを収集**されている
2. その結果、**多様な聖句の統一性・整合性の試み**が欠如している
3. 取り上げられた**文脈**において**聖句の真の意味**の探究ミス、聖書解釈の基本的原則が身につけていない
4. 「セカンドチャンスがあるはずだ」の視点での**主観的読み込み**、**こじつけによる解釈**である
5. 他



4-4 神学的言明の権威の度合い

エリクソン

1. 聖書の**直接的な言明**には、最高度の重要性を与えるべきである。
2. 聖書からの**直接の含意**にも、高い優先順位を与えなければならない。
3. 聖書が**おそらく含意していると思われるもの**、すなわち、さまざまな仮定や前提の一つが蓋然的である場合に導き出される推論は、直接的な推論よりも、権威においていくらか劣る。
4. 聖書から**帰納的に引き出される結論**については、権威の度合いはさまざまである。
5. **一般啓示から推論された結論**は、より明確ではっきりした聖書の言明につねに従属しなければならない。
6. 神学者たちは、**全くの憶測**を言明したり、活用したりすることもある。それは、聖書におけるただ一つの言明や暗示を基盤にした**仮説**や、あるいはある種の曖昧さをもった不明瞭な聖書箇所から引き出された仮説であることが多い。

久保氏の誤り

- 久保氏は、「神学的言明の権威の度合い」の識別において、完全に失敗しておられる。
- 久保氏がなぜこのような失敗をされるのか考えてみると、「聖書観」の中身にひとつ問題があると思われる。絶対的無誤説において歴史性や目的性を無視した「こじつけ」「読み込み」が見受けられるが、このあたりにひとつの盲点があると思われる。
- 歴史性や目的性を無視して、「ある部分だけ」を**切り抜いて、自己主張の文脈にはめ込む**やり方は問題である。
- 今日の福音派の神学者の中で、「一般啓示による救いを考慮する潜在的信仰」や「多様な普遍救済主義の傾向」「絶滅説」など、今日の人々の必要や問いに対する応答としての神学的取り組みが盛んになってきているのだが、彼らはそれら主張の「神学的権威の度合い」がかなり下位にあることを自覚したうえで、その主張をしている。久保氏の誤りは、**憶測や仮説のレベルの主張に新しい教理の発見者であるかのような立場で「最高度の重要性」を与えておられる**ところにある。

5 M.J.ERICKSON “EVANGELICAL LEFT”より

福音主義者が共有してきた救いの教理における主なポイント

1. **神は**、罪や誘惑に触れられることのない、**全く聖いお方**である。神は神と交わりをもつように人間を創造され、神は神がそうであるように全く聖いものとあることを人間に期待されている。〔神論〕
2. **すべての人間は**、行為と性質の両方において**罪人**である。人間は罪深い行為を行うだけでなく、人間は罪深い性質をもっている。神の目に正しい人間はひとりもない。だれひとり、救いに値するようなことをすることはできない。〔人間論・罪論〕
3. **救いの唯一の基盤は**、**イエス・キリスト**の罪のないいのち、贖いの死、復活である。〔キリスト論・贖罪論〕
4. **この救いの受け入れは**、キリストにある**自覚的信仰**のみによる。〔救済論〕
5. **死はこの救いを受け入れる機会を終結させる**。キリストともっている関係は、死の瞬間に永遠に確定される。〔終末論：個人終末〕
6. **キリストを信じるすべての人々は**、この生涯のうちに救いを受け取る。そして**天国の、神の臨在の中で**永遠に過ごす。他のすべての人々は、終わりのない、永遠の怒りと苦しみの場所である、地獄に運命づけられる。〔終末論：永遠の刑罰〕



5-1 「セカンド・チャンス論」の問題から JEC信仰告白の「救済論」「終末論」を考える

JEC信仰告白:簡易信条タイプ

第5条 すべての人は、性質においても行為においても**罪人**である。しかし、キリストを主、また救い主として**受け入れるものは罪ゆるされ**、神のみ前で永遠の命を喜ぶものとなり、キリストを**拒むものは刑罰**を受けて苦しむものとなる。

★簡易信条型の単立教会は、「セカンドチャンス論」等の教理的“流行性感冒”に弱い。教理的**チェック機能・評価分析機能**が弱い。ローザンヌ誓約やウエストミンスター信仰告白等には、補完的役割を期待できる。

ウエストミンスター信仰告白: 詳述信条タイプ

第32章 人間のからだは、**死後**、ちに帰り、朽ち果てる。しかし彼の**靈魂**は(死にもせず、眠りもせず)不死の本質をもっている**ので、直ちにそれを与えられた神に帰る**。義人の靈魂は、その時に完全にきよくされ、最高の天に受け入れられ、そこで、彼のからだの全きあがないを待ちながら、光と栄光のうちに神のみ顔を見る。また悪人の靈魂は、**地獄に投げ込まれ、大いなるさばきまで閉じ込められ**、そこで苦悩と徹底的暗黒のうちにあり続ける。聖書は、からだを離れた靈魂に対して、これらの**二つの場所以外には何も認めていない**。



5-2 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』 プロテスタント教会の信条について

1. プロテスタントとは、「わたしはここに立つ」とはっきり自分の信仰を告白、表明する者である。信条はまさにその信仰の内容を定義しているものである。
2. 信条は、自分自身の、そして私たちの教会の信仰と生活が共同の教会の信仰と生活に立っているかどうかをチェックするための規準、**正統と異端とを区別するための規範**である。
3. 信条はキリスト教宣教と教育の素材を提供するものである。宣教には**客観的なメッセージ**、入会に際して要求されるもの、教育において**教えるべき真理**と教会の所信を必要とする。
4. 信条は教会の**一致と協力の基盤**である。一致の基盤は状況主義ではなく、真理における一致が基本である。



5-2-1 ウェストミンスター信仰告白

第一章 聖書について

- 第二項: 聖書すなわちしるされた神のみ言葉という名の下に、今では、旧新約のすべての書が含まれている。...これらはみな、神の靈感によって与えられており、**信仰と生活の規準**である。
- 第九項: 聖書解釈の無謬の規準は、聖書自身である。従って、どの聖句も(多様ではなくて、ひとつである)真の完全な意味について疑問のある場合も、**もっと明らかに語る他の箇所によって探究**し、知らなければならない。



5-2-2 ローザンヌ誓約 第二項 聖書の権威と力

- 「私たちは、**旧・新約聖書全体**が、神の靈感による、真実で、権威ある**唯一の書き記された神のことば**であり、それが確証するすべてにおいて誤りがなく、信仰と実践の**唯一の無謬の規範**であることを確認する。...
- ローザンヌ会議の最初の発題講演を宇田進博士は「**権威の問題**は、キリスト教会が常に直面せねばならない**最も根本的な問題**である。」ということばをもって始められた。伝道と回心者の教育を進めて行くにあたって、＜教理＞は欠かせないし、その際「何を教えるか」という問題が起こってくる。



5-2-3: エリクソン著『キリスト教神学』聖書論

1. 霊感の定義

- 聖書の霊感とは、**聖書記者たちに対する聖霊の超自然的影響**を意味する。そのことによって、彼らの文書を啓示の正確な記録とし、また彼らの書いたものを**実際神の言葉**であるように結実させたのである。

2. 無誤性の定義

- 聖書は、それが**書かれた時代**に文化と伝達的手段がどれくらい発達していたかということを考慮に入れて、また、それが**どのような目的で与えられたもの**なのかという視点で正しく解釈するなら、すべての記述において完全に真実である。



5-2-4-1:ローザンヌ誓約・

第三項 キリストの独自性と世界性①

- 私たちは、伝道の方法には色々あることを認めても、唯一の救い主と唯一の福音のみが存在することを確認する。私たちは、**すべての人が、自然における神の一般啓示によって何らかの神知識を有していることを認める。**しかしながら、**それが救いへと導くものであることを否定する。**なぜなら、人間は、不義によって真理をはばんでいるからである。私たちはまた、あらゆる類のシンクレティズムや、キリストはすべての宗教やイデオロギーを通して差別なく平等に語っているというようなことを暗示する対話を、**キリストと福音に対する冒瀆**とみなして拒否する。イエス・キリストは、唯一の神＝人であられ、罪人のための**唯一の贖いの代償**としてご自身を与えられた方として、神と人との間の**唯一の仲保者**である。



5-2-4-2: ローザンヌ誓約・

第三項 キリストの独自性と世界性②

- 私たちがよって**救われる名**は、ほかに存在しない。すべての人は罪のゆえに滅びつつあるが、神はすべての人を愛しておられ、一人の滅びるのも望まれず、かえってすべての人が悔い改めに至ることを望んでおられる。とはいえ、**キリストを拒否するもの**は、救いの喜びを放棄し、自らを神との永遠の断絶へと定めている。イエスを『世界の救い主』として告知することは、すべての人がそのままで究極的には救われるということを確認することでも、いわんや、すべての宗教がキリストによる救いを提供しているということを確認することでもない。むしろ、罪人の世界に向かって神の愛を告知し、**悔い改めと信仰による全人格的な明け渡し**によって神に応答するように、すべての人を招くことである。イエス・キリストは、他のすべての名よりも高くあげられた。私たちは、すべてのひざが彼にかがみ、すべての舌が彼を主と告白する日の来たらんことを切望する。



5-2-5 ウェストミンスター信仰告白 第三十二章 人間の死後の状態について、また死人の復活について

1. 人間のからだは、死後、ちりに帰り、朽ち果てる。しかし彼の霊魂は(死にもせず、眠りもせず)不死の本質をもっているため、直ちにそれを与えられた神に帰る。義人の霊魂は、その時に完全にきよくされ、最高の天に受け入れられ、そこで、彼のからだの全きあがないを待ちながら、光と栄光のうちに神のみ顔を見る。また悪人の霊魂は、地獄に投げ込まれ、大いなるさばきまで閉じ込められ、そこで苦悩と徹底的暗黒のうちにあり続ける。聖書は、からだを離れた霊魂に対して、これらの二つの場所以外には何も認めていない。
2. 終わりの日に生存している者は、死を味わわないで変えられる。死人はみな異なった性質をもってではあるが別のものではない全く同じからだをもってよみがえらせられ、彼らの霊魂に再び永久的に結合される。



5-2-6 : ウェストミンスター信仰告白 第三十三章 最後の審判について

1. 神は、イエス・キリストにより、義をもってこの世界をさばく日を定められた。すべての権能とさばきとは、み父から彼に与えられている。その日には、背教したみ使いたちがさばかれるだけでなく、かつて地上に生きたことのあるすべての人も、彼らの思いと言葉と行いとのために申し開きをし、また善であれ悪であれ彼らがからだで行なったことに応じて報いを受けるために、キリストの法廷に立つ。
2. 神がこの日を定められた目的は、選民の永遠の救いにおいて神のあわれみの栄光が表わされ、邪悪で不従順な捨てられた者の永遠の刑罰において神の正義の栄光が表わされるためである。というのは、その時に、義人は永遠の命にはいり、主のみ前からくる満ち足りた喜びと慰めとを受けるが、神を知らずイエス・キリストの福音に服さない悪人は、永遠の苦悩に投げ込まれ、主のみ前とみ力の栄光とからの破滅をもって罰せられるからである。



参考文献リスト

1. 久保有政著『聖書的セカンドチャンス論－死後の回心の機会を示す八つの聖句－』レムナント出版
2. ウィリアム・ウッド著『「セカンドチャンス」は本当にあるのか－未信者の死後の救いをめぐって－』いのちのことば社
3. M.J.Erickson “Evangelical Left” “How shall they be saved?” [安黒編「死後の回心と救いのチャンスについて」]
4. 宇田進『神学入門』「新聖書辞典」いのちのことば社
5. 牧田吉和『中間状態』
6. ミラード・エリクソン著『キリスト教神学』I～IV、いのちのことば社
7. JEC信仰告白：JEC施行細則より
8. 『ウエストミンスター信仰告白』新教出版
9. 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』いのちのことば社
10. 『ローザンヌ誓約－翻訳と解説－』いのちのことば社

